

こぼれ話 27

造園研究家・小澤圭次郎の見た松連寺

江戸時代に百草村にあった松連寺（現在の京王百草園）は、風光明媚な地として江戸の文人たちに愛された名勝でした。

1842年に桑名藩医の家に生まれた小澤圭次郎（1932年没）は、かつて大名の屋敷にあつて名園と言われた園庭が、明治になって荒廃するのを嘆き「明治庭園記」など数々の研究論文を執筆したほか、自ら造園も手がけた人物です。

小澤は江戸で医学や蘭学を学んでいた文久元年（1861）三月、二十歳のとき、多摩川に遊び、初めて松連寺を訪れました。そのとき、「百草村松連禅寺之図」という木版刷りの一枚画を入手しました。

そして明治九年（1876）四月、友人の大槻文彦と小金井の桜を見た帰りに百草を再訪した小澤は、松連寺の荒れ果てた姿に驚きます。小澤は前述の木版画（現在は国立国会図書館所蔵）に、「後苑・山上の諸名勝は大いに荒蕪して、寺院の広間は村堂らの小学校に兼用せられてありき。」と、後年回想を記しました。

百草や落川の子供たちは、同九年十二月に落川の真照寺に昭景学校が開校するまで、三沢にあった潤徳学舎へ通学していました。しかし、小さな子供が歩いて通うのは大変だったのでしょう。昭景学校ができるまでは、旧松連寺の広間が近所に住む子供たちの仮の小学校として使われてようです。

